

第3回 JR 松山駅周辺まちづくりシンポジウム《概要》

日時：平成 26 年 1 月 26 日（日）14:00～16:30

場所：国際ホテル松山 南館（鳳凰）

次第（敬称略）：

〔挨拶〕市長挨拶(14:00～)

野志克仁（松山市長）

〔第1部〕基調講演(14:10～)

柴田 いづみ（建築家、滋賀県立大学名誉教授、
結のまちづくり研究所・柴田いづみまちなか研究室代表）

〔第2部〕パネル・ディスカッション(15:15～)

■パネリスト

柴田 いづみ

山下 裕子（㈱まちづくりとやま主査、NPO 法人 GP ネットワーク理事）

夏井 いつき（俳人・エッセイスト）

野志克仁（松山市長）

■コーディネーター

安孫子 尚正（リージョナルデザイン㈱代表取締役）

（以下敬称略）

1. 挨拶（松山市長 野志克仁）

松山市は「一人でも多くの人を笑顔に 全国に誇れる、わがまち松山」をキャッチフレーズに掲げ、市民の皆さんと一っしょに「たからみがき」のまちづくりを進めています。

瀬戸内松山構想を含め、広域観光に取り組んでいますが、昨年度、道後温泉の外国人の宿泊者数では初めて1万人を超えました。国から海外向けに新しいゴールデンルートが提唱され、京都、広島、松山となりました。道後では、芸術祭「道後オンセナート2014」を開催、連日観光客で賑わっています。

また今年は、瀬戸内海国立公園80周年、道後温泉本館120周年、そして四国遍路、四国八十八カ所が開かれて1200年という3つが重なる特に観光で大きなチャンスの年となりますので、基幹産業である観光を中心に、全国にPRできる機会と感じています。

魅力があふれ笑顔のあるところには多くの人が集まってきます。JR松山駅周辺もまず駅や駅前広場を取り囲み、街そのものが楽しく、そこで過ごす時間が豊かになるよう市民の皆さんとまちづくりを進めていくことが大変重要なことであると考えています。

まちづくりの主人公である市民の皆さんと一っしょに、地域の宝を磨き上げ、そして新たな魅力作りに取り組むことで、自分たちの町に愛着や誇りを持ち、市外の人から見ても、訪れてみたい、住んでみたいと思える全国に誇れるわがまち松山をつくっていきたいと思っています。本日のシンポジウムを、まちづくりに向けた課題や今後の展開などについて、お集まりの皆様とともに考える機会としていただければと思います。

2. 第1部：基調講演（建築家、滋賀県立大学名誉教授 柴田いづみ）

今回は「まちに生きる、まちと生きる、まちが生きる」というテーマでお話しします。

まちづくりって何でしょう。環境問題で「Think globally, act locally」といって地球のことを考えると個人が行動しなくてはいけないということが言われます。まちづくりはずっと act locally で、最後にその社会を動かす move globally や move society になると思います。今までは、全体を考えてその中で個々の人はどうしたら良いか、だったと思いますが、今の時代はいち

ばん強いのは市民です。いちばん強い個が動かないと何も動かないということも現実的にあります。

大事なのは共に動くと書いて「共動」だと思えます。違う立場の人たちが一緒に動いて、ちょっと山を上がってみると違う地平線が見える。動かないで頭の中だけで考えていたって限界があるわけです。私は、一人一人が共に動くことで、まちづくりができるのではないかなと思えます。

皆さんご自分の家において避難はどうだろうとすぐ考えると思えますが、自分の家にいること自体が安全ということがまず基本だと思えます。これは我が家ですが、防火壁や緑地帯をつくったり、歩道状空地を敷地内につくったり、建物自体をコンクリートにし、極力、窓も減らして緑の壁、緑の防災カーテンをつくりました。私有地ですがこのように壁面緑化や、歩道状空地をつくり、好きな街のため共用で使ってくださいという場所をつくと、向かいのマンションもいっしょに緑化してくれました。一つ一つの活動が前の建物にも伝播して、いまでは、夏は緑道になっています。

次は、高架駅に関する事で、私がやってきた設計の一端をお話ししたいと思います。福岡県の行橋駅と駅周辺計画ですが、雨どいが柱に絡みついたり、架線柱という電柱を受けるところが出っ張っていたり、地震が起きたら落ちてきてしまうような形になっているので、そこを全部整備しましょうと提案しました。専門的な部署みんなが主張して、全部やっていたら、ごちゃごちゃになってしまうので皆さんが円卓会議で意見を出し合うところから始めました。私がフランスへ留学していた時にポンピドゥー・センターで「駅の時代」という展覧会でロビネという人のスケッチがあり、私はこれを勝手に「やさしいモンスター」という名前を付けました。巨大で力があるけれども優しい。私は円卓会議の時に「やさしいモンスター」ということを考えて判断しませんか。つまり、何かを判断するときに、「これは優しいですか、優しくないですか」ということをまず基準にして考えましょう、と言いました。

まちに対する景観では、いままでの高架橋の下は真ん中に通路があって、そこに向かって店が開いている、薄暗いイメージがありました。それだとそこを歩く人も楽しくないし、街に開いたお店がないところを歩くと楽しくないですね。街にいる人たちが活きるようなかたちをつくらなきゃいけないと思うのです。ですから、構造の設計変更だったのですが、みんなが納得していく方式をとるということが次の段階にステップアップできるわけです。エレベーターと階段をつくったり、「みどりの窓口」にハンドバック置き場をつくったりユニバーサルデザインにしました。街に向かって開いている店舗は、柱が10mピッチで、小さなお店がいっぱいあったので、小割にも対応できるよう5m×2とし、5mに分けるためにベンチ兼照明をたてました。

市民の人たちが考えた行橋駅前のコンセプトは「駅を出たら森だった」ということでした。今年行ってみました、残念ながら当初植えた木がそのままあるだけで、森にはなっていないかったです。けれども、良い感じで街に広がりが出てきたので、本当の意味で街が活性化していくかなと思えました。

次にコロネードです。車にとっては道路が突っ切るので、街を分断しないという言い方ができても、イメージとして分断しちゃいけません。土木躯体は大きいですが、イメージとしてやわらかくし、街を分断しないように存在させることにしました。

次は福島県の矢吹駅の駅周辺の計画です。延長2kmに渡る連続立体高架のすべての土木躯体、駅前の南北の駅前広場もぜんぶ設計いたしました。ここは駅がぽつんとあって駅前に広場をつくる場所がなく線路の上に駅が出来るタイプですが、橋上駅の跨線橋の下に広場をつくりました。これはみんなの舞台だというお話しをしたのです。眼鏡みたいなところからみんなが自分の街を認識する。これはすごく大事なことだと思うのです。階段を降りてきたら、自分が主役の舞台があり、舞台に下り立つのは市民なのです。また、舞台にいつも人がいるわけではないので、緑の新芽が出て木陰をつくって、そのそばでおにぎりを食べている子どもたちがいても良いということで、舞台の上にケヤキを植えました。手前も丸い舞台です。丸いところが噴水で、農業用水を使って良いという許可を得て、小さな浅い水がたらたら流れる滝みたいなものをつくったのです。

ちょっとした水でびちゃびちゃしたい人はこのベンチで足をつけたり、濡れたくない人はこっちにいれば良いよとなっています。東日本大震災で街は被害を受けましたが、駅は被害を受けなかったもので、本当に感謝されました。駅に付属する小さなイベントホールがあったのですが、今はそこに商工会議所が仮住まいをしています。

さて、自分の街は自分でつくる編です。滋賀県の琵琶湖の東側に、長浜、彦根、近江八幡と3つの街が並んでいます。

長浜は、黒壁というガラスをつくる会社のグループが古い町屋を改修、テナントを探してきて、ガラスショップや協力店舗のお蕎麦屋さんをつくり、街自体を変えていきました。同時に商工会議所の吉井さんという方が、街並みの再編をして、汚かったアーケードをつくり直しました。改修前は、商店から物がはみ出たりして、これはそれなりに面白かったと思うのですが、それを88年に解体して、長浜御坊の表参道としてつくり変えました。でも、全体の建物をつくり変えたのではないのです。さきほどお話した「私有地だけど、みんなのために少し提供しますよ」という歩道状空地の考え方がすごく生きている例なのです。左側が昔で、大正から昭和初期にかけて、当時流行った看板建築という、ブリキで表面を囲った建物が建っていましたが、アーケード等は所詮エプロンで汚れるのが運命です。だんだんと裏寂れてきてしまっ、このまま長浜は誰も人が来なくて寂れていってしまうのかなと思われたらしいです。それがいまは200万人以上の人がある街なのです。何をしたかという、古いアーケードを壊し、国の補助を得て雁木型アーケードにしました。ぎりぎりに建物が建っていたのを、少し引っ込ませて、来て下さる皆さんに場所を提供しようとしたのです。黒壁と商工会議所の2つの活動が競り合いながら良い街をつくってきました。黒壁は、子供歌舞伎の曳山がすごく有名です。伝統芸能みたいなものを保存してきた。それは現実的なハード面での合意形成に対しても、非常に結束が強く出てきてくれているのです。やはり文化を大事にするところが見た目にもだんだんいろいろなかたちで発展していると思います。アーケードの下で、長浜ちりめんのファッションショー等もしています。

彦根はどちらかと言うと行政主導の場所が多いのですが、彦根城に来ていた人が外の街に出ていくようになったきっかけが、キャッスルロード夢京橋という計画です。元の6m道路を広域の道路にすることで、広い歩道にすばらしい並木道が出来ました。広い道路になり街は二分されてしまったのですが、実際にはとても良い雰囲気、彦根城に来た人たちがこうして彦根城の先の街へ出てくることになったのです。やっぱり、楽しくて綺麗な街は人が歩きます。駐車場に塀をつくりましょうとか、交番も銀行も一貫したルールがあり、それは全部市民がつくったのです。もう1つ、花しょうぶ通りというところがあります。これから文化庁の重要伝統的建造物群保存地区にしていきたい通りです。彦根はいろいろ難しく、いままで重要伝統的建造物群保存地区が1か所もなく、本当に遅れをとっています。でも、ここの街を守る人たちはすごく元気です。モットーが「100の愚痴より10の提言、10の提言より1の実行」なのです。自分たちの失くしていた自信と誇りを取り戻そうということなのですね。こうやって動いているのです。

近江八幡ですが、「埋めてしまえ、道路と駐車場にしてしまえ」と言われていた八幡堀を、川端五兵衛さんが青年会理事長だったときに、「堀を埋めたてた時から後悔が始まる」ということを合図に、ヘドロの堀に船を浮かべて、市民がどぶさらいをしたのです。川端さんの著書「まちづくりはノーサイド」という本の中に「答えは自分の中にある」とあります。まちづくり運動の条件と心得として、「問題が生じた時、いちばん大切なものが何かを決める」。いちばん大切なものは何かということをもまず自分の中で考える。そして、解決の方針を決定したら、それは誰が聞いてもおかしくないか、要するに普遍性があるか。その次、これがなかなか大変。最後まで理想を貫きやり遂げる覚悟はあるか。やっちゃった、始まっちゃった、でもやっぱりそれで逃げちゃおうなんていうのはだめなのです。やり遂げる覚悟はあるかなのです。民間人の集まりである青年会議所と行政側の間には成り行きによって軋轢が生じます。ですが、投げ出すことなく理解と合意を求めていく粘り強さが必要である。そして、問題提起を行った瞬間にマジョリティでなくなることもある。これ、すごく凄い言葉だと思うのです。マジョリティというのは大多数ですが、新

しいことを提案した途端に大多数ではなくなっちゃうのです。たった一人で孤立している可能性がある。でも一歩先に行くマイノリティ（少数）でありたい。「でも一歩先に行くマイノリティでありたい」と、これ凄い言葉だと思うのです。大好きです。

続いては、自分の街は自分で守る。私のいる目白に新しい駅が出来るということが決まりました。その時に住人として、「駅前に緑を植えてください」と言ったのですが、下は線路が走っているので、重たくてだめですと言われました。それで、「それでは隣に広場が出来そうだからそこを広場にして良いですか」と言うと、「そこはイベント広場にしますから駄目です」と言われたのです。駅が出来て目白橋の付け替え工事も終わりましたが、どこも竣工イベントをしないというので、市民が自分達で駅前でイベントをやっちゃいました。目白は学校がいっぱいあるので、グループで分担すると2時間くらいのイベントはあっという間に出来てしまうのです。公的にもここをイベント広場として認めてもらったので、学習院側は駐輪場と緑を植えましようとなりました。この活動は、目白駅周辺地区整備推進協議会が母体となっており、「目白街づくり倶楽部」というボランティアがブレーンとして動いています。オープニングイベントでは学習院のチアガールや市民の人たちがカップレを踊り、自分たちでつくった祭りをしました。そのあとに協議会で防災をテーマにして「自分の街は自分で守る」、自分たちの住む地域の未来像をつくりましようということをしました。今は東日本大震災があり、防災が身近かもしれませんが、そのころはむしろ防犯のほうが身近でした。そこで、防犯と防災をテーマに両方いっしょのアンケートをしました。実は自分たちの街自体をあまり知らないのので、アンケートの結果をまずみんなで認識しながらうちの大学の学生と、地元の人たちといっしょに歩き、ヒアリングをしながらマップをつくりました。目白警察署の方たちも協力してくださって防犯訓練というかたちでいろいろとやりました。目白セキュリティ45という防犯についてのお母様方のグループがこの時期からずっと活動をしています。これもいろいろな結果が出てきたのを皆さんと共有し、その後ずっと目白フェスティバルというかたちで続いています。

もう一回彦根をご紹介します。彦根も60年代に防災街区としてつくられたコンクリートのかなり劣化した廃屋がありました。この地域の街づくりをどうしようという時に、あのシャッターを開けましよう。ただ街で協議していますと、均衡状態になってしまい、そこから飛び上がれない。初動エネルギーがもの凄くかかるわけです。ですから、そのエネルギーを学生に貫き、そのかわり学生は、街に何が出来るか、街には学生に何が出来るかを考えてくださいということをしました。これは街の人たちにも責任があるのです。学生たちに何が出来るかをちゃんと考えてくださいねということもとっても大事なことです。この真正面の一番下のところにカフェがあって、その上に工房があって、イベントスペースQ座というところが、ライブハウスまで学生たちが自主運営をしていました。2001年、Beautiful Business Plan Competitionで、街とつながるという名前のACT、「Action Connect with Town」活動で、最優秀賞をいただきました。その時の彼らの標語は「まちづくりはまちに生きる、まちと生きる、まちが生きることである。ビジネスはまちに生きる、まちと生きる、まちが生きるためにある。」これが標語だったのです。

そのためにどのようなことを仕掛けていくかということ、それぞれ一人一人の個人がまず動くということ、それと、まちは共動、共に動く、一人では動けない。だけどみんなで動く。でも、みんなというのは全員ではないということですね。マイノリティ、少数派でも動いて責任をとるそれが必要だと思います。

どうもありがとうございました。

3. 第2部：パネルディスカッション

■パネリスト

柴田 いづみ

山下 裕子 (株)まちづくりとやま主査、NPO 法人 GP ネットワーク理事)

夏井 いつき (俳人・エッセイスト)

野志克仁 (松山市長)

■コーディネーター

安孫子 尚正 (リージョナルデザイン(株)代表取締役)

【安孫子】

最初にパネルディスカッションのテーマを皆さんといっしょに認識をしたいと思います。シンポジウムは本日が3回目ですが、第1回目ではJR駅周辺の魅力と役割、2回目はJR、県、市のトップが語るJR松山駅周辺の可能性ということでディスカッションをしてみました。

現在日本は少子高齢化と人口減少の真ただ中で、都市が縮退していくという現象は避けられない状況になっています。このような中で街をコンパクトにしていくということが全国的にも叫ばれています。街をコンパクトにというのは、都市を効率的・効果的に整備をしていこうということのみならず新しい街の魅力をつくっていこうということです。そのために何をしていくか、この松山駅周辺地区でどんなことができるのだろうかということで、実際に活動を実践されているパネリストの皆さんから今後市民の皆さんたちがどのようにしていくかというヒントを得ようと思ひましてディスカッションをしていきたいと思ひます。

最初のテーマですが、市民活動、市民の文化的な活動で、最初に山下さんですが、路面電車を生かしたまちづくりというのを進められているのが富山市です。そしてコンパクトシティを目指す都市として全国的にも注目をされています。その富山市で広場をつくりながら街の活性化を導いてきたという実践経験を持たれている山下さんにその活動の紹介をしていただきます。

【山下】

富山から参りました山下です。昨日、松山に初めて訪れて、すごく市民の皆様の活動が活発な場所なのだという印象を受けました。フランス人の哲学者で「街というのは建物や道路のことではなく、街に住んでいる人のこと」という言葉がありますが、それがもうすでにすごくある松山に、もしまちなか広場ができたらもっとわくわくする場所になるのではないかとということで、富山市のまちなか広場の事例を少し紹介させていただきます。

広場という場所はまず、出会いの場所だと思ひています。子どもたちがいる光景が常にあり、子どもとお年寄りが出会ったりします。立ち止まれる場所、多種多様な人の交流が生まれる広場が街にあることで富山の町は豊かになっています。いつも人がいる場所という立地が重要だと私自身思っているのですが、JRの愛媛県最大の公共交通の結節点である松山駅前に広場ができるかもお聞きしていますので、すごく楽しみな場所なのだと思ひました。

いつも楽しい場所ということですがグランドプラザはわかりやすく言うと貸出スペースです。使用料が1日最大で20万円かかるスペースですが、いちばん若い利用者が高校生、いちばん遠い利用者は石垣島の方、使用料をなんと年間約100万円払う一主婦の方もいらっしゃいます。そんな市民のアクティビティ、イベント等をしたくなる気持ちが広場によって生み出されているのかなと感じています。使用料収入によってグランドプラザ、広場を運営するお金になっています。富山の中心市街地は実は寂れるぎりぎりのところにあったのですが、中心市街地でイベントをすることによって、人がいるまちなからしい景色が再び定着しつつあり、人に人が引き寄せられて来街機会がすごく増えています。アンケート調査でも、月に約1回まちなかに来ていたという方たちが今では週に1回以上来ていただいている状況になっています。

もう1つ、公共交通と公共広場がセットであることがすごく重要ではないかと思ひています。グランドプラザにもLRT、路面電車のグランドプラザ前駅ができ、交通弱者と言われていた、車を運転できないお子さんや学生さん、またはお年寄りの方が公共交通を使ってまちなかに遊びに来ていただいています。交通弱者が来られることによって無目的で何も用事がなくても街に行ってみようという日常が生まれています。松山市でも、昨日路面電車に乗って、高齢者の皆さんがICカードをスマートに使っていたのが印象的でしたが、富山はまちなかを活性化するために広場

をつくっているだけではなく、郊外から公共交通でまちなかまで来てしまえば大幅な割引になるサービスが行われており、ますます街に行きたくなるような施策をたくさんやっています。

そんなまちなか広場は、今はイベント会場というだけでなくロビー空間として機能しているのかなと思っています。たとえば観光や視察で富山に来られた方がまず降り立つ場所が広場ですので、外国人の方や車椅子の方など様々な方が街の中でくつろぐことによって自然と共に見られて見ているという状況が生まれています。そんな人たちがテーブル、椅子があり、くつろぐことで立ち止まってすごくのんびりとされています。広場があると、時間や気持ちに少し余裕がある人たちがくつろいで、だんだん顔見知りになってお話しを始めるような要素になります。いろいろな出会いを生んでいる場所が広場なのかなと思っています。

コンパクトシティという言葉について、インフラ整備がどうという説明は、私は一市民としてあまり腑に落ちなかったのですが、早稲田大学の宮口先生が、「人と人が出会う機会が増えることなのだよ」と教えてくださって、すごく納得できたと思っています。生身の人と人が出会うことによって、ありとあらゆる素敵なことが、楽しいこともうれしいことも生まれるのではないかなと思いますので、まず出会うことが重要なのではないかなと思っています。

広場ができたことでいちばん変わったことは子どもたちが街に戻ってきました。まちなかというのは実は子どもの手を安心して離せる場所が少ないと思いますが、グランドプラザではお母さんたちが本当に安心して子どもが裸足になるくらい楽しく遊んでいただいています。そういった場所が、まちなかや人がいるところにあることで子どもといろいろな人たちが自然と出会う場所にもなっています。人がたくさんいることでまちなかの価値が上がり、移動販売車や来られる方が非常に増えています。まちなかという場所の価値が上がることはイベントを増やすことにもなりますし、街のお店も増えたという結果がついてきています。

松山にもそんな広場ができることを楽しみにしています。

【安孫子】

ありがとうございました。

次に夏井いつきさんから、松山は100年前に正岡子規が俳句の文化という土壌をつくって現在受け継がれておりますが、そこで100年俳句計画という活動を実践されている夏井さんに、市民の文化的な活動と松山らしさについて、お話しただけでないでしょうか。

【夏井】

夏井でございます。柴田さんや山下さんのお話から「建築って結局人のここを変えていくことなのだ」ということを率直に思いました。

30年くらい前から100年俳句計画の核のような活動を私はして参りまして、松山という俳句の都で俳人という仕事をさせていただいています。俳句を生業とするような仕事をする上で、松山という土地の利というのは非常に強いですね。「東京に出て活動しないのですか」とよく言われるのですが、俳人として松山という街を捨てるメリットはどこにもない。私たちの100年俳句計画は教育文化のところから出発しました。俳句甲子園も16回が終わり、今は俳句甲子園を応援しに来る親族や、大人のための俳句甲子園をやるようになると500万人以上と言われる俳句ファンの人たちが松山という地名を俳句の活動で頭に入れてくださるようになりました。

人が動き出すと今度は観光経済も動き出すわけです。松山市が「松山は行く」という観光事業をしていますが、俳句チャンピオン決定戦の番組で伊佐爾波神社（いさにわじんじゃ）の階段を大学生がぱっと駆け上がって、あれを全国で見た皆さんから、「学生がぜいぜい駆け上っている神社ってどこですか」と、私全国に行くと言われまして「伊佐爾波神社と言いますから松山へ行ったら必ずあなたも駆け上ってください」と言っているのですがそういう効果が出てきます。

もうひとつは、医療福祉現場です。実際に俳句の活動をしていますと視覚障害の皆さんが目は見えないけれど俳句を楽しむことで見えないものが見えてくるようになる。うつ病の方が俳句を

やることで自分を客観的に見てそこから改善が見られる。さらに、俳句と脳の研究会を立ち上げまして俳句をつくることで認知症の予防になるというような結果も手に入れています。

俳句という核を通すことで松山というものを世界に向かって発信できる。HAIKU というアルファベットはこのままのハイクで世界共通語でございます。

そして、松山らしさという切り口で松山駅をどう考えるかという、松山駅を下りた瞬間に「俳都だ、俳句の都だ」と思ってくださいと、ほかの土地と違ってすごい松山らしさの大きなポイントだと思います。風が聴こえて光があって水があって、願わくば松山駅に降りたらそれは小さな丘の頂上でホームに小川が流れ込んできたり、ホームから緩やかな丘をたどって下において行けたり、そういう妄想を抱いてきたのです。柴田先生、私のこういう要求を優秀な建築家にお願ひすればいくらかでもやってくれるのではないかと、そんなことを思いながら聞いておりました。

【安孫子】

ありがとうございました。それでは今度は柴田先生にお話しを伺いたいのですが、今夏井さんから松山らしさが俳句ということでそれを建築でどう表すのかというお話がありましたはその点をご紹介いただけないでしょうか。

【柴田】

今言ってしまうと設計になってしまうので、それは企業秘密ということで。松山らしさというのは、「ずっと住んでいて、皆さん何を誇りに持っていらっしゃるでしょうか」ということだと思うのです。私みたいなよその人間だと限られたアイテムしかお話しできないです。そういうものってむしろいろいろなかたちで協議会ができていると思うので、ワークショップ等でみんなで出し合わないかぎりには出てこないし、ましてやかたちにはなかなかしづらいものではないかなと思いますね。駅を出たら森だったというのも市民のグループからみんなの話合いの中で出てきたのです。

それともう1つ、そのように市民が言ってくださったということが市民にとっての今度は責任になっています。実は矢吹のほうでも桜を植えますと言われたので、青年会議所に「桜は虫も付くし落ち葉も大変だし良いんですか」と、わざと悪いことばかり言ったのです。それでも、「やります」とおっしゃったのですね。みんなが自分で何かをやるってことでそれに対する責任も自分たちにあるし、自分一人のことではなくて、父母、子、孫のこと等いろいろなことを自分で認識しながら喋られると思うのです。それはよそからの人間としてはわからない話です。

俳句は凄いいと思います。感性を磨くという作業がさっきの脳の活性化などにもいくのだろうなと思うと、俳句で駅を表現してみることができるのか私はわかりませんが、ワークショップの最後にそれを端的な言葉で言い表すと春の駅ってどういうものですか、秋の駅ってイメージは何ですかって、参加者みんなで俳句で表してみるのもあり得るかなと思いました。

一つ一つの自然をキャッチできる駅というのはあってほしいなと思います。

【安孫子】

ありがとうございました。今度は野志市長に松山駅周辺のまちづくりの市における位置づけと現在の取組みについてお話しをいただけないでしょうか。

【市長】

今日柴田先生のお話しを聞いて松山のまちづくりは間違っていないな、方向性は間違っていないなと再確認いたしました。そして富山の山下さん、富山も視察に行かせていただいています。松山の公共交通を生かした少子高齢化や環境に対応したまちづくりから考えると富山はまさに先生です。そして夏井いつき先生が俳句のことを言ってくださいましたが、去年の11月にEU、ヨーロッパ28か国の代表のファン・ロンパイ大統領が松山に来られました。EU5億人のトップ、あのファン・ロンパイ大統領が松山に来たいと言ったのです。なぜか。俳句の都だから。俳句はそ

れだけ魅力のあるものなのです。活かしていきたいと思います。

松山を俯瞰で見ていただくと道後は観光地です。大街道銀天街は商業地でありオフィスです。松山駅に観光や商業やオフィスがメインになるところをつくってもしようがないと思いますので、重ならないものをつくっていききたいと思っています。ではどうするのかというと、人が集まってくる場所、情報を発信できる場所を松山駅に持たせていきたいなと思っています。平成32年度の完成を目指して鉄道高架は県が、土地区画整備事業は市が、共同でやっている。限られた予算です。県と市が争い合って何かをつくる時代ではないです。今 JR は県と市が共同でやっている、松山外環状道路は国と県と市が共同でやっている。松山は良いかたちができていると思います。今年には様々な内容が明らかになってきますので、皆様にはどうぞ注視をいただきたいと思います。

【安孫子】

ありがとうございました。それでは次にテーマを変えて、市民文化と市民の活動について、求められる市民参画ということについてお話しを伺っていこうと思います。

最初に山下さんにお話しを伺いたいのですが、先ほどご紹介をいただいたグランドプラザの事例で、利用が非常に活発になることを聞かせていただきました。そういった活動が生まれてきたところの成功した要因というのを少し絞ってお話しただけでないでしょうか。

【山下】

富山の場合、市民活動はもともと活発ではない街でしたので仕組みとして使用料を取る、場所代をとるということをまずやりました。新潟県長岡はもともと NPO 活動が大変盛んな街ですので、アオーレという広場は、ほとんど無料に近い安い利用料になっていますが、グランドプラザの場合はお金を出す、要するに気持ちを引き出すきっかけとしてお金を出すという仕組みをつくったことにまず特徴があるのかなと思っています。お金を出すと絶対無駄にしたいくないわけですから皆様のやる気が本当に引き出されてイベント活動が活発になっているのかなと思っています。ただ、使用料をとるというだけではもちろん活動は引き出せませんので、最初のころはマッチング事業をよくやっていました。アイデアを持っているやりたいことがある市民、特に若い人と、アイデアはないけど予算がある企業様に来ていただいて、広場の中でお見合いをしていただくイベントをグランドプラザが自主企画としてやりました。何かをしようとしている人は実はいっぱいいらっしゃると思うのです。そういった何かしようとしている人たちに対して、コンコンとノックをする役割が運営事務所の最初のころの役割だったのかなと思っています。

【安孫子】

ありがとうございました。次に柴田先生にお伺いしようと思うのですが、松山市が愛媛大学の学生祭の中でまちづくりのブースを出したそうです。その時に学生の方から積極的な協力を得られたそうですが、先ほどの先生の基調講演の中でも学生が生き生きと参加をされている点がありましたので、こういった若い人たちが参加する街とか、事例からより深いところをお話しただけでないでしょうか。

【柴田】

先ほどのぼろビルをどのように活用していったかという話は、強制的な話では全然なく、1つの自分たちの夢、ライブハウスという夢を実現させるものだったのです。大学の単位でも、もちろんアルバイト代でもない、でも夢ともまた違うかたちでの社会貢献という意味合いですよね。

これは社会人がやったのですが、ひこね街の駅「寺子屋力石」を拠点にして紙甲冑教室ができて、彦根城の400年祭で紙甲冑隊ががんばって出てきてくれる。そういう人たちがまた他所の仲間たちを呼んでアートフェスタという、学生たちがつくったお祭り、学生たちと街の人たちが

コラボしてイベントが毎年続いているのです。ゆるキャラで「しまさこにゃん」、「いしだみつにゃん」、「おおたににゃんぶ」の3匹の猫がおり、運営しているのが LLP ひこね街の駅という有限事業会社です。子どもたちとのコラボも学生や街の人たちがいっしょに企画しています。

次に、元郵便局を学生が中心となって改装いたしました。1階がカフェで2階が「彦根を映画で盛り上げる会」という民間のオフィスになっています。そこで「偉大なる、しゅららぼん」や「僕は友達が少ない」など小説や漫画を原作とした映画の撮影をこの建物がある通りでやっています。ずいぶんいろいろな方たちが学生のクラブから社会人のグループまで、またそれが波及してそれがまた学生を巻き込んで、というかたちで今動いています。2階の和室を、展示場やシェアオフィスにして映画やセル画を守る会等、市民と学生のコラボの場所になっているのですね。

【安孫子】

ありがとうございます。もう一度柴田先生にお伺いしたいことがあるのですが、基調講演のいちばん最初に共に動く「共動」ということをおっしゃっていたのですが、この2回目のテーマが市民の文化的な活動を盛んにさせていこうということなのですけれど、その点で共に動く「共動」というお話をレクチャーいただけないでしょうか。

【柴田】

もの凄く簡単で「1歩歩きましょう」と。1歩前に行くと1歩違う地平線がその先にあるので、その1歩違う先、5歩出たらもっと良いというかたちで違う立場の人と5歩まで動けば違う立場の人の気持ちがわかる。まちづくりの中でもいろいろな立場の人がいて100人100通りの意見が出ると思うのですが、まず行ってみる。いっしょに動いてみよう。あれはおかしいじゃないかって言ったら、そこまでいっしょに行ってみよう。あそこの場所がちょっと注目に値するねと言ったらそこまで行くワークショップを誰かが組み立てていっしょにやろうかと。そういう共に動いてみるというかたちが必要でしょうということをお話しさせていただきました。

【安孫子】

ありがとうございます。

【市長】

先生の言われたことまさにそうで、今、国自体が1,000兆円の借金を抱えており、地方交付税交付金や国庫出資金というかたちで地方にお金が配分されてくるのですが、これから増えるとは考えにくい。そういった中で少子高齢化ですから今から働いて税金を払ってくれる子どもたちの数は少ないわけです。では、どうやってまちづくりをやっていくのだと。絶対失敗は許されないと私は思っています。そういう中で昔の行政のやり方と今からのやり方とはおのずと違うと思うのです。行政が押し付けをしてまちづくりをするようなそんな時代ではない。いろいろなタイプの首長さんがいると思うのですが私は積み上げ型の首長だと思っています。まずは市民の皆さんの動きを待つ。それが出てきたらサポートする。今、三津浜も北条のまちづくりも、地元が実際に動いてくださることになって、サポートさせていただいています。道後もそうです。去年宝蔵寺が燃え、一遍上人立像が燃えてしまった。地元の方々が「もういっぺんプロジェクト」というのを立ち上げて動きが出てきました。地域の方々が主体で動いてくださるようになったからサポートしよう。行政と地域、行政と民間が両輪で動き出したら本当の地に足着いたまちづくりができると私は思っているのです。だからそういうかたちのまちづくりが外れない、成功できるまちづくりができると私は考えています。

【柴田】

新しい公共という考え方がありますね。今までは公共事業は全部行政がやっていたけれど、そ

うじゃないよと。その時に、行政は、民間の方や地元の人や地域の人たちがやるということが主体だからといって逃げちゃいけないということ。行政はやるべきことはやる。それが市長の言われたサポートするというかたちだと思うのです。そのかわり出てきた時にキャッチできるだけのノウハウをいつも頭の中に入れていないとキャッチできませんからそれは必要である。また、民間の人たちも、言ってマイノリティになるということを恐れてはいけません。少数派になってもいいから言いたいことはちゃんと行ってやってみる。民間の人たちと私はいろいろお付き合いをしている中でみんなに言っているのですけれど、行政の失敗は許されないのですよ、今お話があったように。でも民間は失敗許されます。許されるからやってみましょうと。やってできなかったらごめんなさいと言って尻拭いは行政にやってもらえば良いことです。地元の人たちが自分たちのやるべきことって何だろうなということ、すごい意見がいろいろ出てくる、それぐらいであってほしいなと思っています。

【安孫子】

ありがとうございます。ここで、まちづくりの進み方の姿勢が行政のトップである市長からお話がありましたが、今度は松山の市民の立場から夏井さんいかがでしょうか。

【夏井】

今お二人のお話を聞いていて、私も俳句という仕事を持ちながら1つやれてきた小さな活動が最初の俳句甲子園にあたるのかなと思って聞いていたのです。

俳句甲子園は16回行いましたが実はその前に第1次俳句甲子園構想がありましたが金銭的な問題で潰れ、そのあとで私は第2次俳句甲子園構想から関わったのですが、こちらも潰れました。その当時の大学の学長や経済界の方、松山市、愛媛県それぞれ代表者による発起人会まで来たのですが、その発起人会の席上でまた金銭的な問題で砕け散ったのです。その時に、当時の松山大学学長の宮崎先生が出直そうって言ったのですが仲間たちは疲弊しきっているわけですよ。「夏井さん、もうこれ以上無理だ」みたいな。その中でちょっとあきらめの悪かったのが宮崎学長と私で、いろいろなところで「俳句甲子園は松山でやらないとだめだと、東京の武道館でやられたら終わりですよ」って。それから俳句をやっている人が1人もいなかった松山青年会議所の文化発信委員会の方々が、松山から何が発信できるのだろうって考えて行き着いたのが俳句で、俳句のはの字も知らない、つくせたら季語が3つも入るような俳句をつくるような30代以下のお兄ちゃんたちが「いつきさん、僕らには予算があります」と。第2次俳句甲子園構想は始まってもないのに話だけがやたら膨らんで2000万くらいの予算になって潰れたのですが、第3次俳句甲子園構想を経済同友会で私がお話をさせていただいた後、興奮したような顔の厳ついお兄ちゃんが3人ば一と寄ってきて、「夏井さん、僕らとやりましょう、俳句甲子園。松山から発信するのは俳句なら他の都道府県に絶対取られない」って取り囲んでくださって。「僕らには予算があります。60万円です」って言って。「これ、いいかもしれない」と思って。「あとは手弁当で僕らが働きまくりましますから60万でできるものをやりましょう」と。「1回何かやり出したら、そこで行政はちゃんと僕らがやることを目にとめてくれますから」って励まされて60万円で始めました。今では松山市の援助もいただきながらNPO法人が立ち上がりました。そして俳句甲子園の何かがありがたいかという俳句甲子園に出場した高校生たちがOB、OGになって大学生や社会人になっても、当日3日間のスタッフとして、全国から50人、60人、70人と自腹で帰って来てくれるのです。彼らは松山を第2の故郷だって堂々と言ってくれます。この間は「嫁さんを連れてきました」とかって、16回ですからね、子どもを連れて「お父ちゃんの第2の故郷だ」なんて来てくれるようになっているわけです。

さっき先生のお話しの中に何を誇りにするかの差によっておっしゃったのですが、私が松山の人たちに俳句松山を核にしたらどうですかというのを30年間言い続けてきて、いちばん皆さんが拒否なさるのが、「できません、俳句なんてできません」。そんなことはどうでも良いのです。俳句つ

くれるふりだけしたら良いのです。みんなが手帳みたいなのを持っていて「何か書いているよあの人たちって、あの人たち愛媛県の松山の人だから」とかって。それがアピールになるでしょう。お隣の香川県見てください。うどん県ですよ。香川県人全員が本当にうどん全員好きですか。私は懐疑的です。でも香川県の皆さんがうどんを誇りにしてうどんで発信しようっておっしゃるからうどん県ですよ。私たち俳句市やりませんか。下手で良いです。うそで良いです。つくれるふりだけしてください。以上です。

【安孫子】

ありがとうございます。今、宝として俳句というものが夏井さんから語られてきましたが、また野志市長にお話しを伺いたいのですが「たからみがき」のまちづくりということと、さきほど市長から積み上げ型のまちづくりという姿勢を持っているというお話しをいただきましたが、ここで今一度その点について深くお話しをいただけないでしょうか。

【市長】

「たからみがき」のまちづくりなのですが先ほど申し上げたように今から大枚はたいてどンドン箱ものをつくっていくような時代ではないです。たとえば何かつくったならば最初に建設費が要って、行政がつくったら「もうやめました」ということできないですよ。維持管理をずっとしないといけない。建てる時にもの凄く考えなくちゃいけないと思っています。地方都市松山です。東京や大坂に比べると地味で、よく地方都市に住んでいる方は「わしらのまちには何もないわい」って言うのですが、全然そんなことはないです。私は全国に出張へ行く機会が増えましたが、松山ってもの凄く伸びしろが大きな街だと思います。全国には1,800の市町村がありますが路面電車はわずか17しか走っていないのです。路面電車が走っているから少子高齢化に対応した環境に配慮したまちづくりができるのです。松山がだっ広い街で、都市の機能が集約されていなかったら、中心商店街、大街道、銀天街、まつちかタウンがなかったら、松山城、道後温泉、道後温泉本館もありませんでしたら、どんなまちづくりをしていたでしょう。そう考えると松山ってものすごく伸びしろが高い。だからこれから少子高齢化に対応した環境に配慮したまちづくりを松山はもの凄くできると思います。

そして柴田先生からさっき言っていたいただいたアンテナ、大事ですよ。就任させていただいてから常に言っているのは、これからは市民協働のまちづくりだと。そのためには説明が大事だと。これまでの行政は物事が決まらなると皆さんになかなか説明ができない雰囲気があった。でも途中でも良いから説明しましょうよ。例えば皆さんから市役所に相談があった時、検討しますと言っても、結果が出るまで長くかかります。いろいろな意見の方がいるから。今まではその結果が決まるまで言わなかったところがありますが、途中経過でも良いから言いましょうよ。そうじゃないと市民の方は納得してくれないし納得してくれなかったら余計動いてくれないでしょう。職員に、現場にできるだけ出てください、説明してくださいというのを大事にしています。市長自身も動きます。それがタウンミーティングです。松山市は41地区に分かれます。各地区でお困りの点があるでしょう。各地区の魅力もあるでしょう。そういうのを教えていただいですぐさま市政に反映できることからやっていきましょう。お金がないからといって思考停止になってしまうのではなくて知恵と工夫でやれることがあります。行政と地元の皆さん、行政と民間の方が連携することによってできることがあります。何もしないのではなくて皆様の声に誠実に耳を傾けて誠実に取り組みたい。一般的には政（まつりごと）で治める政治ですが、私は誠（まこと）で治める「誠治」をしたいのでタウンミーティングを重ねています。こういう場を皆さんとのアンテナにさせていただきたい。意見交換の場にさせていただきたいと思っています。

今から松山のまちづくりはすごく大事なところを迎えますので、行政だけでやってしまっ市民の声が届かなんだなんか言うたらそんなのは松山市らしくないですね。市民の皆さんの声を反映していくのが松山流のまちづくりですから、これからいろいろな場面がありますので皆さんの

声を届けていただきたいと思いますし、私たちもそれを吸収して良いまちづくりにしたいと思いますのでよろしくをお願いします。

【安孫子】

ありがとうございました。市民の側からしますと今度は進んで街に飛び込んでいこうということなのですが、最後にパネリストのお三方に一言ずつこの松山駅周辺地区がまちづくりの発信拠点となるようにしていくということに関して一言ずつメッセージをいただけないでしょうか。夏井先生からお願いします。

【夏井】

仕事柄、全国の小中学校、高校、いろいろなところに行って俳句を教えるという仕事をしているのですが、いろいろな街の駅に降りてここはどこだっけとか私今何しにどこに来たんだっけみたいな旅の仕事をしているとついついそんな思いにとられる時があります。松山駅が降り立った時に俳句の都らしい風のおいや風の色がしたり空気の肌触りが感じられたり、そういう唯一無二の「まさにこれが俳句のまち」という駅だなどと思ってもらえるようなものになったらありがたいなと思っています。降り立った時に俳句のまちってというのが、なるほどと腑に落ちるものになれば素敵だなと。そんなことを思っています。

【山下】

富山市はまちなか広場ができて行政の方は前例がないではなく何でもやってみようという姿勢になったことが大変私は嬉しく思っています。松山駅の前がいまおっしゃられた「ふり」でも良いから俳句を詠む人が増えるような場所になったら本当にメディアとして、広場はメディアだと思っていますので。松山は動くメディアだと思っている路面電車が句が書いてあるのです。知識としては知ってはいたのですが、すごくそれが印象的でしたし言葉というものを大変大切にされている街なんだということが、街の風景によって自然と感銘を受けました。それで松山は人にやさしい街だと、スクランブル交差点も大変安全な交差点ですし路面電車もそうです。街にベンチはすでにたくさんあるのですが広場がその横にあることによって様々な出会いが生まれて俳句を詠いたくなるような気持ちが芽生えるような街になったらすごく喜ばしいかなと思いました。

【柴田】

近江八幡で空き町家を改装して活動している DIGS というグループがあります。さきほど宝のことを言っていたらっしゃいましたが実は DIGS も「宝を掘り当てる」という意味の学生グループです。2010 年名古屋での COP10 の際、公式な視察が滋賀県にも来るということで、西の湖という琵琶湖に付属する小さな湖を自分たちで調査して、西の湖の生き物を知ろうということをしました。付近の人たちはいろいろな知識をお持ちです。学校の先生ではなくても、その地域の村や街の人たちのほうがいっぱい地域のことや村のことを知っていたりして、そういうところからいろいろ聞き出すキッズ学芸員、学芸員を養成しようというプロジェクトを DIGS の学生たちが立てて発表しました。ソーラーボートにも乗ったり地域の人に話を聞いたり、それをリスト化したりして、視察の外国人さんたちに発表するので自分たちで T シャツづくりをしました。そういう過程が楽しいのですよ。失敗しても良いと思っています。ですがその過程の中で結びつく人たちがどういう次の活動をいわばイノベーションしていくか、要するに発明してつくり上げて行動していくかが大事なのではないかと思うのです。やっていること自体この場所が DIGS という場所なのです。これがいわば山下さんの言う広場にあたる部分なのですが。これ俳句でどうですか。

【夏井】

良いですね。

【柴田】

自分の俳句を胸に掲げようと。

【夏井】

かっこいいじゃないですか。真剣にみんな俳句やりだしますよ。ここに下手なのを付けて歩くのはなかなか勇気があるし。

【柴田】

そうですね。こうやって子どもたちにプレゼンテーションの機会があって、それをまた新聞にしてあげてと。

それから、まちなか博覧会というのをやったのですが、おじいちゃんおばあちゃんの引き出しの中にいっぱい入っている昔の写真をその場所に展示しました。これは左義長という伝統のある祭りなのですが、寅年だったときには12年前の寅年の写真を集めているとか、そういういろいろなかたちで、街の中を廻らせるのです。そういう装置をつくっていきます。ほかに八幡堀祭りのときに、子どもたちが行灯つくりをやったり、東日本大震災の後だと三陸の「きりこ」に合わせたかたちの行灯にして、東北の支援をしましょうということもしました。ついでにDIGSでは、いわきぼうけん映画祭という、東北の方々に昔の震災前のいわきをもう一回思い出してもらおうということもやりました。こうやってごちゃごちゃみんなでするのが良いのですよ。こういうようなことをやって自分が主体になって何かをつくってその成果品が目の前にあるっていう体験をやったり子どもたちの学校でやってもらえたら良いなと思っています。

【安孫子】

ありがとうございました。松山駅周辺が16.7haと広い範囲で整備をされていくのですが、土地区画整備事業によって底地を整備し新しい建物が建て替わってくことで目に見えて新しい街並みが生まれます。そうした新しく生まれる空間は市民の共有財産であると。そういうところを契機として、このシンポジウム、パネルディスカッションを始めたのですが、まちづくりで実際に活動されている3人のパネリストと松山市長のお話を伺っているいろいろなキーワードが出てきました。やはり最初に市民が動くということ、結論からすると、やはり市民が求めているということは自らが行動していくことの先にある。つまり失敗はそこにはなくて、行動していくということが一番大切なんだよということが結論なのではないかなと思います。市民が求めていく価値を自ら動くことによって後世に伝えられていく。きっと俳句もそうなのではないかなと思いますが、そういった中で市民が動く。そうすると今度は市長がおっしゃっていましたが松山市ではしっかりとサポートをしていくのだと、そういうことで積極的に市民参画の場を今後も松山市としては進めていくのだそうです。本日こうしてこのシンポジウムにご参集いただきました皆さんが、ここにおられない隣近所の方、友人知人の方に今日の話話を話していただいてどんどん口コミで広げていただいて「何かしようよ、何ができるかな」という対話をしていただくことが非常に大切だと思います。

今後もこの松山駅周辺のまちづくりが進められている中でセミナーやワークショップを開きますので、こういった機会にぜひ市民の皆さんの積極的な参加をお願いしたいということと、仲間を増やして皆さんの関心をより集めていただいて、まちづくりを進めていきたいと、このシンポジウムがそういうきっかけになれば良いかなと思います。今日は長時間に渡りみなさまありがとうございました。